慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	トハズダガタリ : 「カタリ」の一形態 : 源氏物語における意義
Sub Title	Towazugatari :Voluntary remarks in Genji Monogatari
Author	伊東, 肇(Ito, Hajime)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1970
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.28, (1970. 2) ,p.1- 16
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00280001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

トハズガタリ―「カタリ」の一形態―

〈源氏物語における意義〉

伊東肇

一

一体に「カタル」と言った場合、我々は「話をする（状態）」と認識している。具体的に言うならば、話し手と聞き手との関係があって、初めてその間に話をする状態が成立するわけである。それ故、「カタル」とは他者に対して相互の共感性、協調性を持とうとする言語行動であると言える。しかもこれを古代的意味において考えた場合、カタルとは神聖な、そして対内的な共感を伴った話をすることであった（『物語史の研究』三谷栄一）。そのため古代におけるカタリは言霊（ことだま）としての信仰要素を強い基調としてもっていた。

それが後世〈平安朝〉になるとカタリは一般通念化し、文学において物語というジャンルを形成するとともに、いわゆる日常会話としてのかたらい、おしゃべりという意味にもなって形式化した。そしてこのことがまさしく言霊信仰における「魂の風化」（『折口信夫全集七巻』「巫女から女房へ」）の延長を意味していたことは否めない。

それでも平安朝に頻出した物語作品、特に『源氏物語』に描かれているモノガタリの場面は、多くの場合その本来の意味内容が失われているにも拘らず、なお、カタリが行われる形式において古代的要素を残留していることが知れる。

カタリが形式的にも、内容的にもモノガタリに至る前段階である（『物語史の研究』三谷栄一）、とするならば、『芸文研究』「物語という語の二つの性質について」第二十号）において大輪靖宏氏が説かれているように、モノガタリの内容が「亡き人についての昔モノガタリ」と「男女のモノガタリ」であるとする結論は、多分にカタル内容の本質的変遷を示唆していると言える。更にその形式が、同じく大輪氏の言われるように〈モノガタリというものを、それが行われる形式の面から定義するならば、話し手と聞き手とが「打ちとけた」「へだてない」間柄であることが必要であり、「しめやかな」「しのびやかな」話し方でなければならないのである〉とする限りにおいては、カタリ方の古代的姿を髣髴させるものがある。

以上のおおまかな点からしても、カタルとは話し手と聞き手との共通な問題、或いは相互に暗黙の内に要求している事柄について問答し、かたらうことであり、それを行うことによって両者の理解を一層深め、相互のコミュニケーションをはかろうとする目的意識をもった、言語行動であると言える。

ところがここにいま一つのカタリの形態がある。

それは、前者的カタリが、話し手と聞き手との相互意識によって成立し、それを行うこと自体に両者の対内的共感をうえつけようとする性質をもっているのに対し、これは、最初から聞き手の意志を考慮に入れず、カタリをする話し手の意志だけが、或る目的意識をもってかたられる場合である。つまり相手はいるが、その相手に聞こうとする意志が無いのに勝手に語り出し、それによって相手側に自分の事情を殆ど一方的に知らせ理解させようとする、或いは納得させてしまおうとするカタリである。これを平安朝以後の言葉で「トハズガタリ」という。そして、この形態こそこれから問題にしようとするもう一つのカタリの形態である。

二

「トハズガタリ」という言葉が文学作品において最もはやく、その古い用例――と云っても古代的意味というのではない――として出てくるものに、『蜻蛉日記』（中巻、天禄二年の条）がある。

これもあやしきとはずがたりにこそなりにけれ（注・引用文中傍点は全て筆者・以下同様）

とあるのがそれであり、他に一応の目安として、それ以前に位置する『宇津保物語』（「蔵開」中巻）の

いであやしのとはずがたりや

などの用語例がそれである。

この二つの例から考えられることは、少なくともこの時代には既に古代的「カタリ」の性質は忘却せられ、しかも一般的「カタリ」の形式とも区別されて、一種の変形的カタリの概念として、社会通念化していたのではなかろうかということである。それは二例に共通の「あやしき」「あやしの」という形容詞が、トハズガタリの性格を規定している点で、それが多分に道義的に感心しない「おしゃべり」、といった意味において使われているということである。

しかし、ここで注意しなければならないことは、トハズガタリが直ちに道義的に感心しないおしゃべり、ということになるのかということである。換言するならば、おしゃべりという社会通念は古くからあったにしても、それになぜ「あやしき」「あやしの」ということわりの表現をしなければならないのか。少なくとも「あやしきとはずがたり」「あやしのとはずがたり」といった表現には、聞き手――と云っても実際には聞かされる立場の者――が話し手のカタリ方に対する批判、或いは話し手自身が、批判されるべきものと既に承知していて、そのために多分に自己卑下的、弁護的意識をもっているという面がある。

とするならば、このトハズガタリという語は、それが行われる形式から言っても、また語られる内容から言っても、相手側からどうしても「あやしき」とか「あやしの」とかいったことわりの言い方をもって言われなければならない必然性があったからではないかと推定される。

と言うのも、同じカタリという言葉であっても、或る場合はモノガタリと言い、この場合はトハズガタリと言うことは、モノガタリが、その社会通念化する過程及び原初形態において、特別なカタリ方として意義づけられ、認識されていたのと同様、トハズガタリにおいても、それが普通とは違った特殊なカタリ方であったからこそ、このようなカタリの通念が成立してきたのだと考えられるからである。

ではトハズガタリとは、それが社会通念化する以前、どんな内容のことを語り、如何なる形式で行われ、如何なる意義をもっていたのか、ということになると、平安朝以前は漠としてその姿をつかむことはできない。そこで今、時代を平安朝に限り、その中でも物語文学の集大成である『源氏物語』を中心に、その中でトハズガタリが如何なる意味のもとに使われ、意義づけされているか調べてみることにする。

三

『源氏物語』の中に見い出されるトハズガタリは、源氏物語大成の索引によると十三例ある。いま、それが使われている状況をみてみると、およそ五つに分類できる。

(1)モノガタリの場面で、話し手が自分からトハズガタリと言っている場合。
(2)作者が話し手のカタリを第三者的立場からトハズガタリと言っている場合。
(3)話し手が話題の人物に対してトハズガタリという観念を例に引いている場合。
(4)聞き手の気持を作者が代弁してトハズガタリと言っている場合。
(5)作者が物語を構成する上でトハズガタリという概念を使用している場合。

(1)の場合は「明石」の巻、源氏が紫の上に明石の地から送った信書に

又あやしうものはかなき夢をこそみ待しか、かうきこゆるとはずがたりにへだてなき心の程はおぼしあはせよ

又、「玉鬘」の巻、源氏と紫の上との会話において源氏が言う言葉で

わりなしや、世にある人のうへとてや、とはずがたりはきこえいでむ

前者の場合は、源氏が明石の上との交情の後、急に在京の紫の上のことが恋しく思われ、普通ならばひたかくしにする情事を、紫の上恋しさのため、自ら告白的文章を書き、これに対してトハズガタリと言っている。

後者の場合も同様の意味において使われている。その内容は、かって源氏が、なにがしの院で会った夕顔の遺児、玉葛が上京したため、彼女を手元にひきとろうとして、紫の上に昔の情事をうちあけているところである。

つまり、この二つのトハズガタリは、源氏が紫の上と交信し、モノガタリすることを、一つの手段として、自分の情事を告白懺悔することの目的において使われている。即ち、源氏の態度は、その内的要求——所謂、語らずにはいられないという積極的な気持——からトハズガタリと言っているのである。

(2)の、作者が話し手のカタリを第三者的立場からトハズガタリと言っている場合には、「明石」の巻、源氏と入道との会話において入道の語る様子を、

後の世をつとむるさま、かきくづし聞えて、このむすめのありさま問はず語りにきこゆ。

と言って、作者は老人である入道の語り方を的確な目でとらえている。即ち、「かきくづし聞えて」という表現が、如何にも老人のポツリポツリと語る口調をあらはしている。語っている内容は、自分の娘の素上であり、それをうちあけることで、源氏の心を娘のほうに引き寄せようとする。それ故、それを聞かされている源氏の心を作者は、

をかしきものの、さすがに「あはれ」と聞き給ふ

と書き添える。老人の、というよりも受領の下衆根性に対する苦笑がある。

又、「椎本」の巻で、前に出生の秘密を暗示された薫が、再び弁の御許を呼び出してモノガタリさせる場面で、

こなたにて、かの問はず語りのふる人めし出でゝ、のこり多かる物語などせさせ給ふ。

とある場合も、弁の御許に対する薫の懐疑的態度を、作者が客観的に描写しており、しかも弁に対して「かの問はず語りのふる人」という表現で、トハズガタリを揶揄的性格に規定している。

更に「手習」の巻においても、妹尼の所を訪れた中将を、彼女が亡くなった自分の娘のことと想い合わして懐しく感じている所で、

たまさかに、かく物し給へるにつけても、珍しくあはれに思ゆべかめる問はず語りも、し出でつべし。

と思っている様子を、作者は客観的に描写し、このような状況においては、トハズガタリをするにちがいない、というふうに表現している。しかし、このような妹尼の内的要求も中将の側からしてみれば、見苦しく、はしたない態度にうつるにちがいない、ということ

も作者は読者に感じさせている。それ故、そのような妹尼の気持を汲んで作者は、そのすぐ後で女房達に、妹尼が亡き娘のことを語りたい気持を代弁させている。

(3)の、話し手がトハズガタリという観念を例に引いている場合では、「椎本」の巻に、

中納言の君は「ふる人のとはずがたりみな例のことなれば、をしなべてあはあはしうなどはいひひろげずとも、いと恥づかしげなめる御心どもには、聞きおき給へらむかし」と推し量らるるが、

とあって、ここでは薫は「ふる人の問いもせぬのに余計な事を語るのは、すべて世間には例のことであるから、一様に広く誰れにもかれにも、柏木と女三の宮との一件を軽々しくなどは言いふらさなくとも」と思い、弁のトハズガタリを感心しないおしゃべりと評価している。

又、「手習」の巻に

「あやしう物思ひ知らぬにや」とまで、見侍る、有様は、老人の、問はず語りに、聞し召しけむかし」とあり。

とあって、妹尼が中将にあてた文書に、浮舟の有様を語った母尼のカタリ方を「老人の問はず語り」と言って例に引いている。

(4)の、聞き手の気持を作者が代弁して、トハズガタリと言っているのは四例あって、十三例中、最も多く使われている場合で、まず「葵」の巻に

大将殿は心地少しのどめ給ひて、あさましかりし程の問はず語りも、心憂くおぼし出でられつゝ、いと程へにけるも心苦しう

とあり、大臣の姫君が御息所の生霊に苦しめられながらも出産を了えた後で、源氏が生霊の怨恨告白の言葉を思い出している気持を、作者は、あさましいまでのトハズガタリと代弁している。

又、「蓬生」の巻、源氏の使いで末摘花の様子を見に来た惟光が老女の話しを聞いてうるさく思い、いい加減に聞き流して帰ってくる場面で、

めづらかなる世をこそは見たてまつり過ごし侍れ」と、やや、くづし出でつゝ問はず語りもしつべきが、むつかしければ、「よしよし、まずかくなむきこえさせむ」とてまゐりぬ。

とあって、これも又、作者が惟光の気持を代弁してトハズガタリときめつけ、揶揄的な評価を与えている。

更に又、「橋姫」の巻において、薫が弁からはじめて自分の出生についての昔語りをほのめかされる場面で、

あやしく、夢語り、巫女(かんなぎ)やうのものの、問はず語りすらむやうに「めづらか」に思(おぼ)さるれど、あはれに、おぼつかなく思(おぼ)しわたる、ことの筋を聞(きこ)ゆれば、いと奥ゆかしけれど、げに人目もしげし。

とある他、同巻の別の箇所で、薫が弁の語る次第について、

「かやうの古(ふる)人は、問はず語りにや、あやしき、事のためしにいひ出づらむ」と、苦しく思(おぼ)せど、かへすぐ〳〵も散らさぬよしを誓(ちか)

ひつる、「さもや」と、またおもひ乱れ給ふ。

とあって、いづれもトハズガタリという観念を、道義的に感心しない、揶揄的性格のものとしてとらえている。

そこで今、(5)の分類へ移る前に、一応、(1)から(4)までの各状況を整理してみると、次のことに気づく。

それは、トハズガタリをする主格の身分によって、そのカタリ方、内容に対する評価が異っているということである。即ち、源氏が自分自身のカタリに対してトハズガタリ、と自ら言っている場合と、それ以外の受領、女房達のトハズガタリ、と言っている場合とでは、作者の意義づけに相違がみられるということである。

つまり、源氏が表面上は一般通念としてのトハズガタリという意味で、それを口にしているにも拘らず、尚それには(2)(3)(4)におけるトハズガタリ的意味とは別の意味が、作者によって意識的に表現せられているということである。

一つには、源氏が貴種であるということ。逆に言へば、貴種であるがためにそれが有意義となり、そうでない者にとっては批難さるべきものとなっているとも言える。

又、このことは内容面に対しても言えることであって、源氏のそれが、男女の情事についてであるにも拘らず、何等の批判もなされていないことは、それがモノガタリ的意義において、「親しい」「へだてなき」間柄の紫の上に対する自己告白、心情吐露といった形をとって行われている点で、やはり、入道的、弁的それとは区別されているのである。又、そうでなければ、源氏の告白が意味をなさなくなる。それ故、この場合(1)の源氏は、トハズガタリすることに、有力な効果を期待して、紫の上に対処していることになる。

しかし、このような二面的意義をトハズガタリがもつにも拘らず、尚、それが行われるにあっては、揶揄的評価が与えられるということは、一体どういうことなのか。単に、「問はれもしないのに、自分からしゃべり出す」からというのでは、いささか説明が不十分

である。

少なくとも、右の疑問に対して、ある程度、納得のゆく説明をするためには、次のような点から検討されなければならない。

(イ)トハズガタリの行われる形式
(ロ)トハズガタリをする内容
(ハ)トハズガタリをする者

(イ)の、形式については、モノガタリのそれと比較することで、ある程度説明できる。

モノガタリとは、言うまでもなく、本来、下から上に向かってなされるものであり、しかも、話し手と聞き手との関係が、一定の条件――「打ちとけた」「へだてない」間柄で「しめやかな」「しのびやかな」話し方をすること（前掲大輪氏の説）――のもとに、一定の法則――即ち、上からの要求、問いかけに対して下の者が語る――に則って、上下のコミュニケーションが相互に無理なく進行する状態である。

これに対して、トハズガタリが行われる場合は、源氏と紫の上との場合を除くと、その殆どが、「一定の条件のもとに一定の法則」といった形では行われていない。というよりは、まったくの正反対の形で行われると言った方が適切である。

もっとも、カタリが下から上になされる点においては、モノガタリと部分的には一致する。それにも拘らず批難されるということは、それが、モノガタリ的条件、法則を無視しているからである。

このように考えると、トハズガタリの形式は、多分に「偶発的」であり、モノガタリ的「カタリ」の定義からはずれた形だと言える。

次に(ロ)の内容について言えば、娘の素上話（「明石」・入道）、出生の秘密（「橋姫」・弁の御許）、亡き娘の昔話（「手習」・妹尼・女房達）、怨恨告白（「葵」・御息所の生霊）、女の身上話（「蓬生」・老女）ということで、殆どがモノガタリの内容――「亡き人についての昔モノガタリ」「男女のモノガタリ」――と一致している。

この、「モノガタリ」と内容が一致しているということが、又、トハズガタリとモノガタリとを区別していることにもなる。それは、モノガタリにおいて、はじめて認められることであって、トハズガタリにおいては、相手のプライバシイの暴露、及び話し手の饒舌、愚痴ということになりかねない。

「カタリ」の定義からはずれているということが、このような上下関係の混乱を引き起すということは、モノガタリが正当な評価、意義を与えられているのに対して、やはり考えねばならぬことである。

更に、(ハ)のトハズガタリをする者については、既に明らかな如く、その殆どが老人、ふる人であり、その身分も受領、女房階級に限定されているが、その中でも、所謂ふる人としての女房が活躍していることは注意せねばならない。

「ふる人」という概念は、今日では老人と同義に解釈されているが、平安朝においては「世間から、もしくは実際上の仕事から用のなくなった者」という意味が正式である。そして、この典型的存在が、所謂各貴族の家に長年奉仕していた女房達だったのである。従って古女房と云われる者達は、当然のことながら、その家のあらゆる事情、秘密に通じており、経験も多く、特殊な知識をもっていることになる。そこで、このようなふる人が、カタリの定義からはずれたカタリをしたらどうなるかは自明のことである。

トハズガタリという概念が、そのようなふる人のカタリ方と結びついていったことは、いわば当然のことである。

そして、この、トハズガタリ＝古女房という結びつきが、実は残された(5)の分類と密接な関係をもっているのである。

それは、『源氏物語』の構成とも大いに関連してくることであり、少なくとも、その一要素として意義づけられたのではないか、ということである。

以下、(5)の分類を検討した上で、このことを考察することにしたい。

四

(5)の、作者が物語を構成する上で、トハズガタリという概念を使用している場合は、前項でも述べた通り、いささかその使われてい

る状況を異にするのだが、詳細は後述するとして、まずその用語例を見てみる。

「蓬生」の巻、結文の部分に、

彼の大貳の北の方、のぼりて、おどろき思へるさま、侍従が、うれしき物の、今しばし、まち聞えざりける心浅さを、恥づかしう思へる程などを、いますこし、問はず語りもせまほしけれど、いと頭いたく、うるさく、物憂ければなむ。今又も、ついであらむ折に、思ひ出でてなん、聞ゆべきとぞ。

この結文で問題となる点は、最後の「とぞ。」を、どのように解釈したらよいかということにある。いま、岩波古典文学大系本の解釈によると、「思ひ出でてなん、聞ゆべきとぞ。」は、「思いだして如何にも語り申しましょう、と言う事よ。」となる。即ち、「とぞ」という書き方は、伝聞的表現ということになる。となると、この主格は、作者とは別の人、つまり、この蓬生の話を語っている人、ということになる。作者は、この物語を書くにあたって、それを知っていた或る特定の人物から、実際に聞いているといった形式をとっているのである。

語り手が、末摘花のハッピィーエンドまで話してきて、もう明らかに先はみえたと思った時、いわば語り手特有の常套文句として、このようなことわりを言ったことを、作者はそのまま結文にしていると解釈できる。そして、このことが作者の文学的虚構であることは言うまでもない。

しかし、重要な問題は、そのような文学的虚構にのみあるのではなく、作者が語り手をして「いますこし、問はず語りもせまほしけれど」と言わしめている点である。

この語り手とは一体誰なのか。少なくともそれが、単なる語り手でないことは、「問はず語り」の内容が、源氏のエピソードであることから、源氏及び末摘花という貴種の近くに居て、その事情を知っている者でなくてはならない。恐らく作者の意図はその点にあっ

て、それ故に作者は、この語り手に重要な位置を与えているのだと解釈できる。

そうなると、ここで使われているトハズガタリは、前項で述べた如き揶揄的意味とは異って、いわばトハズガタリを、貴種についてのカタリゴトと同義に用いて、積極的な意義を見い出していることになる。つまり、トハズガタリを作者は、ここで物語構成の一要素（材料）にしているのである。

このように考えてくると、当然問題となるのは、「竹河」の巻頭に出てくるトハズガタリの使われ方である。

これは、源氏の御族にも離れ給へりし、後のおほとのわたりにありける悪御達の、おちとまり残れるが、問はず語りしおきたるは。むらさきのゆかりにも似ざめれど、かの女どもの言ひけるは

「源氏の御末〳〵に、ひが事どものまじりて、きこゆるは」

「我よりも、年のかず積り、ほけたりける人の、ひがごとにや」

など、怪しがりける、いづれかは、まことならむ。

これによると作者は、鬚黒側の古女房のトハズガタリによって、「竹河」の巻は記したということになる。又、「むらさきのゆかりにも似ざめれど」と記している点からして、紫の上側にもトハズガタリをする古女房がいたことになる。

となると、ここで使われているトハズガタリとは、源氏の伝記、即ち、カタリゴトという意味になり、所謂、暴露とか愚痴とかと云った揶揄的意味のそれとは、いささか異った意義をもたらされていることになる。そして、作者の意図は、まさにこのトハズガタリを、一つの構成要素としている点にある、と考えられる。

つまり、「蓬生」も「竹河」も、トハズガタリという形態を用いなければ成立しない何らかの事情があって、そのために作者は、各々の巻末と巻頭に語り手を登場させているのではないか、ということである。

何らかの事情とは何か。源氏という主人公の貴種性に関連したことなのか、或いは源氏のイメージをもった実在のモデルに対する政治的配慮なのか判然とはしない。

しかし、少なくとも、「竹河」の巻が、鬚黒側のトハズガタリを採用して、源氏の外伝の如く記されているということは、右の推測を派生せしめるものである。

更に、紫の上側の、いわば源氏の正伝とも言うべきトハズガタリが紹介されないまま、「いづれかは、まことならむ。」というふうに表現をぼかしてしまっている点、それは単なる作者の技巧だけではなく、「構想上にもまた作者にも関係する重要な問題を含む」（日本古典全書『源氏物語』池田亀鑑）ものであったろうと思われる。

そして、このことは又、「源氏物語には、大別して、惟光系統のモノガタリと良清系統のモノガタリとがある」と云われる池田弥三郎先生の御説（昭和四十四年、大学院、芸能史講義におけるノートより参取）とも関連してくる問題であろうと思われる。

いずれにしても、「蓬生」と「竹河」で使われているトハズガタリという形態が、作者にとって、物語を構成する一つの要素（材料）となっていたことは確かであろうし、考え方によっては、他にもこのようなトハズガタリが、別の古女房のカタリゴトとして——いわば、その家の事情を語ったエピソード的なもの——、貴族社会にいくつも散在していたということになる。

そして、この点に『源氏物語』の作者が、例えば『大鏡』における作者の態度とは異った意味で——『大鏡』の世継のトハズガタリは、所謂モノガタルという意味で完全に文学的手法に完成している——トハズガタリを用いている文学的、政治的事情があったかと思われるのである。

五

以上、五つの分類に従って、トハズガタリの使われ方とその意義を調べてきたが、ここでもう一度、整理をする意味でまとめてみると、次のような形となる。

〔A〕物語（各巻の）のプロットを発展させる方法として用いられている場合。
ⓐ貴種のトハズガタリ……(1)……積極的意義。
ⓑ老い人、ふる人的トハズガタリ……(2)(3)(4)……揶揄的評価（又は自己卑下的評価）
〔B〕物語の構成要素（材料）として用いられている場合。
ⓒ古女房（ふる人）的トハズガタリ……(5)……カタリゴト的意義。

このことから分かることは、ⓑのいわゆる老い人ふる人的トハズガタリが大勢を占めているにも拘らず、尚、ⓐ的トハズガタリ、或いは〔B〕のⓒ的意義のトハズガタリが、いわば並列的に混用されているという点である。これは、『源氏物語』そのものが、それまでに至る諸作品の集大成という性格のためと思われるが、それでも一つ一つを検討してゆくと、右のような結果が得られるのである。

更に又、トハズガタリの形態と観念とが、多くの場合、ふる人、古女房といった身分境遇の人間達と密接に結びつけられていることが、必然的に意義の低下をもたらしていることにもなってくる。

つまり、古女房、ふる人と云った女性には、その職性上、まだまだ古代的巫女（采女）の性格が、形式的ではあるにしろ、残留していたであろうから（『折口信夫全集巻七』「巫女から女房へ」）、そうなると、ⓒ的トハズガタリ――家々のカタリゴト――の方が、公的にはより古い意味と形態とを兼ね備えていたことになる。それが、私的には個々人の間で行われると、さまざまの障害、不利益をもたらすことから、揶揄的、卑下的評価が示されるに至ったと考えられる。

ただし、『源氏物語』に使われているトハズガタリは、必ずしもそのような、明確な推移をもって表現されているわけでもないから、正確には、例えばⓒ的トハズガタリの中に、ⓑ的評価が先入していたり、反対にⓑ的トハズガタリの中にⓒ的意義が残っていたりして、多分に二つの意味が、あいまいで並列的に使われていることは事実である。

それ故、トハズガタリを、その表現上、具体的に規定している種々の形容詞句――「あやしき」「あさまし」「をかしき」「れいの（こ

と)」「老い人の」「ふる人の」「めづらしくあはれにも思ゆべかめる」――といったものは、トハズガタリという形態のもつ、特殊な、しかも変形的な「カタリ」に対して規定し、評価したものであるということになる。

そして、このようなトハズガタリが、後世になって、一層明確な意識のもとに、文芸用語として、或いは一般的用語として固定されると、一方においては、モノローグ的カタリの意味をもった文学作品――『大鏡』の世継のカタリ、『とはずがたり』の作者の意識等――を生み、他方においては、『徒然草』等に散見出来る「(女の)おしゃべり」(一〇七段)といった観念を完成させてゆくことになるのである。

――昭和四十四年七月五日――